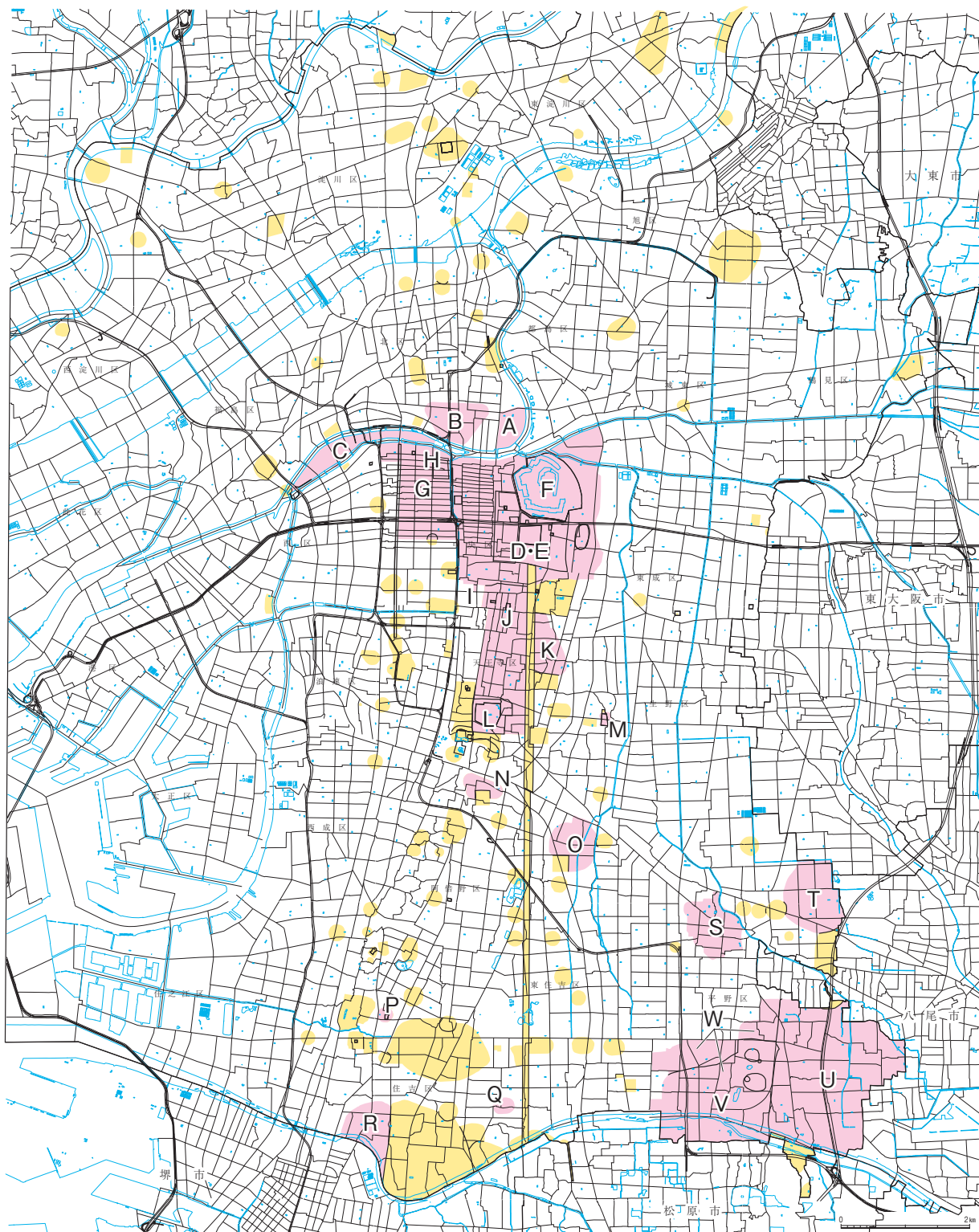


VII. 文化財の調査・研究・保存

2010年3月現在で、大阪市内には170をこえる遺跡が存在することが知られています。これらの遺跡は継続的に発掘調査が行われており、新事実が次々と明らかになっていきます。ここでは、そうした発掘調査成果の紹介を中心にして、私たちが日々行っている文化財の調査・研究・保存活動の一端を紹介します。



大阪遺跡

— 地層を繋いで古地理を描く —

執筆 者：趙 哲済(ちよう ちよるぢえ)

研究テーマ：第四紀学

主要著作・論文：『人類紀・自然学』共立出版、共著、2007年

大学非常勤講師等嘱歴：奈良文化財研究所「環境考古学課程」・「地質環境調査過程」講師(1995～2010年)

①地層の魅力

『大阪遺跡』というタイトルの本があるが、この名の遺跡があるわけではない。しかし、河内平野から上町台地まで、さまざまな顔相(岩相)で分布する地層を語るには、12万年の歴史を持つ大阪遺跡に登場してもらうのがよい。

地層は時間と空間の概念を持っている。地層にはそれが堆積に要した時間と、堆積した広い場所(環境)があるからだ。時間と堆積環境がわかれば、考古学が追い求める人間の活動した時代と場所を示すことができる。これは魅力だ。

②近年の主要成果

大阪遺跡には層序(地層の重なる順序)という遺跡時計がある。この時計、1980年に作り始めて約10年で、分単位まで合わせられるようになった(ちょっと自画自賛だが)。時刻を合わせるには、包含遺物の年代だけでは不安、古い遺物が新しい地層に紛れ込むことがあるからだ。そこで、堆積時間の短い地層を刻み目として探すことになる。だれもが知るように、火山灰が最適である。

富士・箱根に近い南関東では、12万年前以降でも三百枚の火山灰層が判別されている。一方、大阪遺跡で見つかった火山灰層はたったの8枚である。しかしこの8枚、遠方からこの期間に飛来した近畿のスタンダードをほぼ網羅している。

遺跡時計の働きには、洪水層も一役買っている。洪水は気候・気象の不安定な時期に起こりやすいが、人間が土地を性急に開発した時にもよく起こる。一方、安定期には土壌が発達する。埋没古土壌もまた、遺跡時計をスムーズに動かしてくれている。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

地層の繋がり方から、長原の地表下7 mに旧石器時代の地面があると予測したのは1988年、その7年後、同僚が地表下6.5 mで石器製作址を発見した。上町台地の幅が現在の2倍もあったMIS-2の極寒期の遺構である(図1)。2003年には9千年前の河内湾岸がリアス式海岸だったと古地理図に描いた(図2)。次は大阪遺跡の大舞台、台地も海岸も、宮殿も城もある上町で復原を、と取り組んでいる。



てん ま ほん がん じ あと A. 天満本願寺跡

— 城下町「天満」の出发点 —

執筆 者：南 秀雄(みなみ ひでお)

研究テーマ：朝鮮考古学

主要著作・論文：「日本の高句麗壁画研究の現況と展望」朴雅林ほか『高句麗壁画研究の展望とコンテンツ開発』東北亜歴史財団、2009年

大学非常勤講師等応募歴：大阪外国語大学非常勤講師
(1999～2003年)

①遺跡の概要と魅力

大阪の都市の骨格は、豊臣秀吉の大坂城と城下町の建設によりできました。城下町は三つの部分から成り、「上町」→「天満」→「船場」の順に整備されます。秀吉は天満の開発に際し、起爆剤として、泉州にあった本願寺を大坂に移しました(1585年)。これを天満本願寺と呼びます。現在、京都にある東・西本願寺は、天満から移された本願寺が二つに分かれたものです。

天満本願寺の有力な推定地が、現在の造幣局の敷地です。天満本願寺は東西7町・南北5町で、もとの大坂(石山)本願寺と比べ、ことのほか広がったと言われます。

天満本願寺の発掘が始まったのは1994年です。特筆されるのは、造幣局南付近に、大川に面した

豊臣期の大きな屋敷が並ぶことです。天満本願寺そのものの遺構はまだ発見されていませんが、秀吉が築いた堤防、大塩平八郎らが住んでいた江戸時代の与力屋敷跡などが見つっています。

②近年の主要成果

■川沿いの屋敷(写真1・2) …豊臣期の屋敷は大川側に石垣を築いて造成され、広さは1,900～2,500㎡以上になります。大坂城の真向いに当り、水運に関する施設と考えられます。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

天満の発掘調査は、上町・船場に比べて遅れて始まりました。天満本願寺の最初の調査を担当した私は、是が非でも成果を挙げ、天満の発掘の足掛りを作る思いでした。現状でも、天満の考古学的調査は、上町・船場に比べ、ずっと遅れています。天満本願寺の姿もまだわかりません。しかし、船場に比べ、天満の城下町跡は地表から浅い所に埋まっており、調査はより容易です。また、東大寺^{しらぎえのしょう}荘園の新羅江庄など、弥生時代以降の多くの重要遺跡がある場所で、天満の発掘が進まないことには、大阪の歴史は解明できません。



写真1

写真2

てん じん ばし い せき B. 天神橋遺跡

— 中世渡辺津、 そして古代荘園を求めて —

執筆 者：市川 創(いちかわ つくる)

研究テーマ：東アジア陶磁史

主要著作・論文：「9～10 世紀の韓日における陶磁器
生産の展開」、『嶺南文化財研究』19、
2006年

①遺跡の概要と魅力

天神橋遺跡はその名のとおり、大川にかかって中之島をとおり中央区と北区を結ぶ天神橋の北側に位置します。この地域には、天神祭や天神橋筋商店街などがあり、大阪天満宮の門前町として栄えた賑わいを今に伝えています。また、古代には東大寺の荘園であった新羅江庄^{しらぎえのしょう}あるいは安曇江庄^{あずみえのしょう}、中世には大川沿いに存在した渡辺津^{わたなべのつ}が近くに存在したと推定されている地域でもあります。ただこれらの荘園や港湾は、文献史料にその名が見える一方で、その具体的な場所はこれまで特定できていませんでした。そうした中、近年の考古学的な発掘調査によって、おぼろげながら古代から中世にかけての大川北岸の様相がつかめてきています。文献史料だけでは明らかにしえない大阪の歴史に迫ることができる、市内でも重要な遺跡のひとつであるといえるでしょう。

②近年の主要成果

■写真1：2000年度に行った調査のようすです。この調査では古墳時代から江戸時代にかけての遺構・遺物が多量に見つかり、天神橋遺跡が一躍注目されるきっかけとなりました。

■写真2：2008年度に行った調査では、割れていない土師器をたくさん捨てた穴が見つかりました。同じ時期の大阪市内では瓦器^{がき}と呼ばれる黒い器を用いる割合が多く、このように多量の土師器を用いるのは、都であった京都を中心とする文化です。海外から輸入された陶磁器が比較的多く出土することとも相まって、天神橋遺跡に都の文化を受容できる人びとが暮らしたことを想像させます。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

近年の発掘調査によって、先にみた土器や陶磁器などに加えて、遺跡周辺部では中世の畑とみられる遺構も見つかっています。当地周辺に存在した可能性が高い渡辺津、その存否のみでなく景観をも総合的に復元できる日がやってくることを期待できます。また古代についても、瓦や塼^{せん}、そして銭貨が見つかるなど、荘園や寺院が存在した可能性を示唆する遺物も発見されています。まだまだ謎の多い大川北岸の歴史ですが、ひとつひとつの調査を積み重ねて、その具体像を明らかにできればと思います。

写真1



写真2

ひろしまはんくら や しきあと C.広島藩蔵屋敷跡 — 天下の台所をほる —

執筆者：宮本 康治(みやもと やすはる)
研究テーマ：考古学(日本古代・近世、東南アジアなど)
主要著作・論文：『広島藩大坂蔵屋敷跡』I・II、大阪
市文化財協会、2003・2004年

①遺跡の概要と魅力

広島藩蔵屋敷跡は北区中之島に位置しています。近世大坂は「天下の台所」とも称され、各藩の蔵屋敷はその象徴でした。その調査は1990年の佐賀藩蔵屋敷跡が初でしたが、その後、広島藩蔵屋敷についての調査が本格的に始まり、屋敷跡が良好な状態で地下に眠っていることが示されたのです。

②近年の主要成果

調査は1995年に始まり、小規模な発掘が幾度か行われた後、1999・2000年度には敷地北半、2001年度には南半の調査が行われました。その結果、広島藩蔵屋敷の大半が調査され、幕末の遺構面では船入や蔵、中心的な建物である「御殿」など多数の遺構が検出されました。広島藩蔵屋敷については幕末期とそれ以前の絵図があり、遺構との対比も行われました。大量の遺物は屋敷での暮らしぶりなどを示す資料となっています。そして中之島が大川の中州として成立し、その跡に屋敷が設けられること、その屋敷がいくつかの段階を経てい

くことが明らかになりました。蔵屋敷というと江戸時代の絵や絵図のイメージが強いですが、造成や建物の建替を行いながら屋敷が営まれてきた姿が明らかになったのです。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

調査の結果、検出された遺構や出土遺物は膨大で、遺物では大量の陶磁器や土器、瓦、文字を書いた木簡、食べかすなどさまざまなものがあります。例えば陶磁器では日本国内、中国、ヨーロッパなどのものが見つかり、木簡では広島の名を記したものがあります。蔵屋敷に様々なものがもたらされ、活気あるようすをうかがわせます。ただし検討できた資料は限られているため、考古学的な検討を深めることや、文献史料との検討なども行うことで蔵屋敷の実態をより明らかにすることが必要です。

蔵屋敷の調査例は徐々に増えつつありますが、これだけ広範囲の調査はありません。この遺跡を調べることは一屋敷を明らかにするだけでなく、江戸時代の大坂を考えるうえで今後も重要な手がかりであり続けるでしょう。

写真1



写真2

D. 前期難波宮

— 東アジアに繋がる

日本古代宮室の原型 —

執筆 者：積山 洋(せきやま ひろし)

研究テーマ：古代都城

主要著作・論文：「孝徳朝の難波宮と造都構想」『大阪における都市の発展と構造』山川出版社、2004年

大学非常勤講師等応募歴：大阪教育大学非常勤講師(2007・2009年)ほか

①遺跡の概要と魅力

645年、蘇我入鹿暗殺のクーデタによって一連の政治改革(大化改新)が始まり、都は飛鳥から難波に遷りました。『日本書紀』が652(白雉3)年完成と伝える「難波長柄豊碕宮」とは、1954年以来の発掘調査でみつかった前期難波宮のことであり、またその殿舎の柱跡には焼土が見られ、686(朱鳥元)年の火災記事を裏付けています。

前期難波宮は、それまでにない宮室でした。その第一にあげられるのは、東西・南北約650mという規模の大きさで、飛鳥宮を大きく上回るものでした。第二に、南門から北へ向かって朝堂院、内裏南門と左右の八角殿、さらには内裏前殿(正殿)にいたる王宮中心部が、左右対称の中軸線構造をとること。このような宮室の軸線構造は中国王朝の伝統であり、朝鮮半島の百済でも採用された東アジア共通のスタンダードでした。第三に、中心部の周囲に官衙域(官庁街)を配置し、その全体を宮域とする独自のスタイルが生まれたこと。こうして前期難波宮はのちのちまで日本の宮室の原型となったのです。

②近年の主要成果

2005年、東方官衙と呼ばれる役所風の建物群の

東側で、回廊(単廊)に囲まれた石敷の広場とそこに建てられた楼阁風の建物がみつかりました。かなり格式の高い閉鎖的空間であり、ごく限られた人たちがここに入出入りしたようです。近年は木簡の出土が相次いでいることも重要。特に、「はるくさのはじめのとし」と判読された「はるくさ木簡」は、日本の万葉仮名文が、通説より大幅に古い7世紀中ごろには誕生していたことを示す大発見でした。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

前期難波宮の構造は、7世紀の超大国・唐の長安城の宮城、また百済の泗沘城や益山王宮里遺跡(離宮か副都とみられる)の王宮などと共通点が多く見られます。「戦争と内乱の時代」、日本は孤立した島国ではなく、東アジア世界にしっかりと結びついていました。難波宮はそうした国際社会に開かれた日本の姿を象徴するのです。

写真 1



皮は
留る
久く
佐さ
乃の
皮は
斯じ
米め
之の
刀と
斯し

こう き なにわのみや E. 後 期 難 波 宮 — “副都”のイメージから 新たな理解へ —

執 筆 者：佐藤 隆(さとう たかし)

研究テーマ：日本考古学・陶磁史

主要著作・論文：「後期難波宮の造営課程と“副都説”の再検討－奈良時代都城における新たな位置づけのために－」『条里制・古代都市研究』第25号、2010年
大学非常勤講師等応募履歴：大阪経済大学非常勤講師
(2005～2009年度)

①遺跡の概要と魅力

後期難波宮は、前期難波宮と重なって存在する、新しい方の宮殿遺跡です。奈良時代の726(神亀3)年に聖武天皇の命で造営が始まりました。

当時の都としては奈良県の平城宮が有名ですが、他にも京都府に恭仁宮、滋賀県に紫香樂宮(甲賀宮)がつくられるなど、人々のさまざまな思惑のなかで歴史が大きく動き、難波宮もその舞台のひとつとなりました。また、奈良時代の終り、784(延暦3)年には桓武天皇によって長岡遷都が举行されますが、その際にはこの宮殿の建物が移設されています。難波宮はここでも重要な役割を果たしたことになります。

②近年の主要成果

主要な建物が比較的早い時期に明らかにされた前期難波宮に比べて、後期難波宮は、特に朝堂院などにおける調査が1990年代の後半から進み、その構造がわかってきました。また、その周辺においても建物や築地などの存在が確認されており(写真2)、内裏・大極殿院・朝堂院といった中枢部のほかに、どのような施設が広がっていくのか、今後の調査が楽しみです。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

いわゆる「大化改新」との関連から古代史研究のなかで繰り返し検討が行われてきた前期難波宮に比べると、後期難波宮は首都である平城宮に対して“副都”というイメージが先行し、注目度も前期ほどではないように思われます。

こうした現状に対して、私は最近の論文でこれまでとは異なった視点でこの宮殿を理解したいと主張しました。それは以下のような内容です。

後期難波宮は建物の屋根に蓮華文軒丸瓦・唐草文軒平瓦の組合せと、重圈文軒丸瓦・軒平瓦の組合せとを用います。こうした瓦の組合せなどを手がかりに、後期難波宮の造営には第1段階と第2段階とがあり、大極殿院・朝堂院は第2段階の造営で完成したと考えました。並行する時期には平城宮や紫香樂宮でも造営が行われており、後期難波宮はそれらの宮とどこが首都となるかを競ったのではないかと、744(天平16)年の「皇都の宣言」はその争いの一端を示すのではないかと、そう推定しています。

こうした歴史上の動きや、難波宮が立地する上町台地の地形の検討などを含めて、単なる“副都”ではない後期難波宮のイメージを示せるのではないかと考えています。

写真1 重圈文鬼瓦



写真2 2009年度の調査で見つかった基壇跡



難波遷都で失われた古墳を求めて

執筆 者：寺井 誠(てらい まこと)

研究テーマ：弥生～飛鳥時代の日本と朝鮮半島の交流史

主要著作・論文：『外交の窓口難波の考古学的研究』『古代嶺南と大阪の出会い』嶺南文化財研究院・大阪市文化財協会交流10周年記念Symposium、2009年

①遺跡の概要と魅力

645年の難波遷都とそれに続く前期難波宮なにわながらとよぎのみや(難波長柄豊碇宮)の造営は、大阪の歴史の中では画期的な出来事であったのは間違いない。ただ、難波宮を造営するに当たっては、まったくなにもないところ選ばれたわけではなく、それ以前から多くの人が住み、家や墓があったところである。『日本書紀』には、「難波宮をつくるために、墓が壊されたり、建物が撤去されたりした人に補償した」という記述がある。これはまさに新たな首都造営のために、前代の産物を破壊したということを示している。

②近年の主要成果

発掘調査の成果はこの情景をリアルに蘇らせる。谷町筋の西沿いの調査では小さな谷を埋める土から大量の埴輪が出土した(OS93-6次調査)。谷を埋めたのはちょうど前期難波宮の造営の頃である。宮殿造営に伴う周辺整備のために古墳の墳丘を削って、その土で谷を埋めたのであろう。また、難波宮跡公園の北東で、前期難波宮内裏を囲う回廊に当たるところでは、柱穴などから水晶製の三輪玉みわだまが出土し(NW8・20次調査)、すぐ近くからは耳飾り(NW19次調査)や土器棺(NW75次調査)が発見されている。前期難波宮の遺構から古墳

関連の遺物が出土していることから、宮殿造営の際に古墳が破壊され、副葬品が散乱したのであろう。なお、三輪玉は大刀の装飾品であることから、このようなステイタスシンボルをもった人が、将来難波宮が造営される地に葬られていたのである。

上記以外にも古墳関連の遺物は多数発見されている。あらためて『日本書紀』に記された開発の風景が目浮かぶ。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

現在では大坂城や難波宮一帯で発掘調査をしても、古墳がその姿を留めて見つかることはない。しかし、難波宮造営に係る整地層や柱穴から出るということは、このあたりに古墳が存在したということを実に物語るものである。

刻々と進む開発により、上町台地の風景は急速に変わりつつある。発掘調査はこの失われ、忘れてしまった風景を復元してくれる。難波宮については調査研究が蓄積し、建物構成などはかなり明らかになってきた。ただ、難波宮造営の画期を言うなら、前代を明らかにしておく必要がある。資料は着実に蓄積しており、研究を進展させることによって、難波宮以前の難波の風景を復元することにつなげたい。



写真2 前期難波宮内裏回廊柱穴などから出土した三輪玉

写真1 NW75次調査(1975年実施)で発見された土器棺

おお さか じょう あと F. 大 坂 城 跡

— 掘ってはじめてわかる 豊臣期の大坂 —

執筆 者：豆谷 浩之(まめたに ひろゆき)

研究テーマ：近世都市史、大坂の武家屋敷(蔵屋敷)

主要著作・論文：「蔵屋敷の配置と移転に関する基礎的考察」『大阪市文化財協会研究紀要』4、2001年

①遺跡の概要と魅力

大坂城を建設したのは豊臣秀吉であること。そのときにつくられた城下町が現在の大坂の町のルーツであること。これらは広く知られているところです。しかし、残されている記録が少ないため、本当のすがたについてよくわからないことが数多くあります。

1959年に行われた石垣の調査を端緒として大坂城の考古学的な調査が始められ、特に市街地の再開発が盛んになった1980年代以後には発掘調査が急激に進展しました。現在の大坂城内ばかりではなく、かつて城内に含まれていた範囲、さらにはその外に建設された城下町にまで調査の手が及ぶようになりました。その結果、町の部分についても豊臣期の遺跡が各所に残されていることが明らかになり、出土資料を通じて町の構造や移り変わりのようす、当時の生活のありさまなど、さまざまなことが具体的わかるようになっていきます。

天下人の本拠地として設計・建設された大坂城と城下町は、日本全国の都市の成り立ちを考える上でも非常に重要です。その解明のためには、遺跡の発掘調査が不可欠といえます。

②近年の主要成果

■本丸で出土した瓦(写真1)：大坂城天守閣の北側で行った発掘調査で、大坂夏ノ陣による焼土の中から多数の瓦が出土しました。鯰瓦^{しやち}の破片や桐文の瓦が含まれていたほか、姫路城と同じ型でつ

くられた瓦も見られました。

■三の丸跡から出土した陶磁器(写真2)：豊臣期の三の丸にあたる、現在の外堀の北西外で発掘された陶磁器です。鼠志野^{ねずみ}向付や絵唐津^{えからづ}向付などが目を引きます。これらの食器の組成や同時に出土した魚の骨、貝殻などから、宴会のために使用された食器であると考えられています。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

現在の大坂城(徳川の大坂城)の地下には豊臣期の大坂城の遺跡が埋まっており、そのさらに下には大坂本願寺の遺跡が埋まっていることも確実視されています。国の特別史跡内であるため発掘する機会は多くはありませんが、調査することがあればより核心に迫る資料が得られることが期待されます。また、城下町の範囲についても、数々の調査が行われてきたとはいえ、全体の中ではごく一部に過ぎません。特に、最近の調査では城下町と考えている部分の外で屋敷地が発見された例もあり、本当の都市の範囲がどこまで及んでいたかという問題も重要です。



写真1

写真2

F. 大坂城跡

— 時期区分と陶磁器 —

執筆 者：宮本 佐知子(みやもと さちこ)
 研究テーマ：権衡資料、難波宮・大坂城の瓦
 主要著作・論文：『国内出土の権衡資料』『大阪市文化財論集』大阪市文化財協会、1994年

①遺跡の概要と魅力

大坂城という太閤さんが建てたとよく言われますが、現在私たちの見ている石垣は江戸初期に徳川氏によって築かれたもので、豊臣期の石垣はこの下に今も眠っています。また今、大坂城として特別史跡になっている範囲よりさらに広い範囲が豊臣期の大坂城でした。そこを発掘すると整地層や焼土層で前後2時期に分けることができます。

豊臣前期は1580年に焼けた大坂本願寺の焼跡の上に整地して築城した時の面です。後期は三ノ丸造成(1598年)の盛土層があり、その上面の大坂ノ陣によって焼かれた焼土層の時期までです(1614・1615年)。それぞれの面で当時の人々が使った陶磁器に特徴があります。今、私たちが使っているお茶碗やお皿につながる焼き物たちです。

②焼き物の移り変わり

豊臣前期の釉薬を掛けた陶器では、瀬戸美濃焼がほとんどを占めます。天目碗や灰釉の皿が中心です。唐津焼は灰釉や藁灰釉の皿で少量しか出土しません。唐津焼が焼き始められてあまり時間が

経っていないので、そんなに多くは大坂に来ていなかったのでしょう。

豊臣後期になると瀬戸美濃焼では志野や織部焼が始めて顔を見せ始めます。これらの焼き物は豊臣前期にはありませんので、その頃に作り始められたことがわかります。また唐津焼は絵唐津という鉄釉で絵を描いた碗や皿が数多く見つかります。出土数も多くなり、瀬戸美濃焼をしのぐようになります。

これらの陶器と一緒に中国製の青花が数多く出土します。国内でまだ磁器を焼く技術がありませんでしたので輸入していたのです。国産磁器の伊万里焼は1620年代初めころには焼かれています、その頃の大坂ではまだ出土していません。

③陶磁器を通じて明らかにしたいこと

豊臣前期・後期の面で見つかる陶磁器の違いは、発掘や文献でわかっている年代と対応し、より確かな当時の生活の様子を伝えてくれます。どのような人々がどのように使っていたかを明らかにする一助にできるのではないかと考えられます。



写真1 豊臣前期の陶磁器



写真2 豊臣後期の陶磁器

G. “マジョリカ陶器” と城下町「大坂」

— 鎖国期大坂商人のグローバルな目利き —

①遺跡の概要と魅力

豊臣秀吉に始まる城下町「大坂」では、ベネチアガラス、キリストを示す‘IHS’文やポルトガル王家の紋章のある青花磁器、西洋人修道士形国産陶器など、ヨーロッパ関連の品が出土します。大坂ノ陣(1614・1615年)以後、徳川の治世となり、鎖国になっても、大坂商人はその財力と目利きでヨーロッパに思いを馳せていたことが出土品から窺えます。

②近年の主要成果

大坂ノ陣の復興後、大坂は五か所商人として幕府から海外貿易を許可されます。キリスト教禁教令・鎖国というバリエーションの中、相手はオランダ連合東インド会社や中国の船に絞られますが、大坂商人が彼らに注文したことが窺える海外の品が出土します。

例えば、中国漳州窯青花(スワトウ磁器)の「天下一」銘の皿(17世紀後半、写真1)です。日本人好みの「天下一」という銘は中国では使わないので、注文品と考えられます。また、ヨーロッパのマジョリカ陶器の色鮮やかな寸胴壺(アルバレルロ、17世紀後半、写真2)も長崎問屋の集まる地域から数点

執筆 者：松本 啓子(まつもと けいこ)

研究テーマ：日欧貿易陶磁史

主要著作・論文：「鎖国期のヨーロッパ陶器をめぐって」『栄原永遠男先生退官記念論文集』、2010年刊行予定

大学非常勤講師等応嘱歴：相愛大学人文学部非常勤講師

(2004年～)ほか

出土しています。日本でマジョリカは、徳川秀忠墓、大名屋敷や城郭、五か所商人の街の堺・長崎・京都・江戸など、30片ほどしか出土していません。日本の伝世品の大半は茶道具の水指ですが、ヨーロッパでアルバレルロは薬壺です。カトリック修道院付属の病院や薬局で使われ、その紋章や同じ文様で飾る壺がセットで残っています。修道院や病院、薬局のほか、城塞、富裕な商家、窯跡で出土し、高価な注文品と考えられています。

さて、日本のマジョリカの大半を占める特徴的な葉文foglieのアルバレルロですが、ヨーロッパで類品を探すと、胎土や図柄、形態、焼成などの項目の類似はあっても、すべてが一致する壺がありません。あるいは日本人好みにカスタマイズした特注品だったのかもしれませんが。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

16～17世紀は、中国は明から清への交代期、ヨーロッパもルネサンスや宗教改革、大航海時代という、洋の東西を超えて人や物が動く激動期でした。鎖国の中、大坂商人はこの歴史の大波を商機と捉え、海外の品を調達・流通させたと、出土品は物語っています。



写真1



写真2

江戸時代のミニチュア土製品

— 土人形たちが語るもの —

執筆者：川村 紀子(かわむら のりこ)

研究テーマ：江戸時代のミニチュア土製品

主要著作・論文：「江戸時代大坂におけるミニチュア土製品の一考察」『大阪歴史博物館研究紀要』第8号、2010年

①遺物の概要と魅力

江戸時代のミニチュア土製品は、陶磁器のように普遍的に出土するものではないため、考古学の分野ではこれまで研究の対象になっていませんでした。大阪では1984年に中川信作氏が報告したものが最初ですが、東京では多量に出土することから、安芸毬子氏を中心として研究がなされてきました。

ミニチュア土製品の最大の魅力は、かわいらしいこと。誰でも遺物を見ただけで何であるかわかることです。土人形はお雛様のように華やかさはないのですが、江戸時代からずっと作り続けられており、その当時の流行や服装、民間信仰のありかたなど、小さな遺物ですが色々なことを語ってくれる貴重な資料です。

②近年の主要成果

近年、近世を対象とした調査が増加し、詳細な時期がわかる資料が蓄積されてきました。写真1は17世紀前半～中頃のもので、「飛天」をモチーフにした土人形です。土人形としては珍しいモチーフであることだけでなく、大阪で最も古いものです。また2008年の瓦屋町の調査では、大阪市内ではじめて土人形や飯事道具などの型、瓦質の土人形(牛、猿以外のもの)が見つかりました(写真2・3)。この周辺では瓦や陶器なども作られており、ミニチュア土製品はそれらと深く関係しながら製作されていたことがわかりました。



写真1

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

前述のようにミニチュア土製品は、小さいながら多くのことを語ってくれます。よく観察すると胎土の違い、モチーフの違い、底部の穴の大きさの違いなど、地域によって異なっています。ミニチュア土製品の出土する遺跡の性格や出土状況などの特徴を比較検討することで、その流通経路やどのような階層の人びとが使用したのかを明らかにできると考えています。今後も民俗学や文献史学だけでなく、郷土玩具の研究者や人形の生産者の方々との情報交換を行い、江戸時代になぜミニチュア土製品が作られ、普及していったのか。その社会的背景などもあわせて考えられたらいいなと思っています。



写真2



写真3

H. 大坂魚市場跡

おお さか うお いち ば あと

執筆 者：池田 研(いけだ けん)

研究テーマ：動物遺存体

主要著作・論文：「中・近世における大坂城下町出土の貝類について」大阪大学考古学研究室編『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』、2005年

①遺跡の概要と魅力

江戸時代の大坂には生魚を扱う雑喉場、塩干魚を扱う鞆の二大水産物市場がありました。そうした大市場は突然出現したわけではなく、天満鳴尾町周辺から鞆町・天満町(現在の伏見町)へ、うち生魚商は上魚屋町(安土町)を経て鷺島(後の雑喉場)へ、塩干魚商は鞆島へと、市場の形成過程で魚商集団が各地を転々と移動した記録が残されています。現在、遺跡指定されている大坂魚市場跡は、豊臣後期から徳川初期にかけて鞆町・天満町に存在したもので、1986年以来の諸調査で魚名を記した荷札木簡、手鉤、釣針、魚骨などが出土しています。魚市場の発掘調査例は全国でも稀少で、水産物流通の実態を研究する上で重要な遺跡として注目されてきました。

②近年の主要成果

2006年に伏見町1丁目の旧三越跡で行われた調査では、豊臣後期のゴミ穴群から「たい」・「いわし」・「はまち」・「ふく(フグ)」・「めちか(メジカ)」・「かます」・「えそ」・「あち(アジ)」・「さは(サバ)」・「たこ」

などの魚名・数量を記した木簡や、曲物容器に入れた子イルカなどが見つかりました(写真1・2)。また、マダイやサメ類・スズキ・ブリ属・ハモ属・フグ科ほかの魚骨が出土し、タラ科・サケ属・シイラ・カツオなど遠隔地から運び込まれたとみられるものも含まれていました。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

大坂の魚市場は海産生魚の雑喉場、塩干魚の鞆、淡水産魚の京橋など、市場によって扱う商品が異なりました。また、上述した以外にも石町・内平野町に魚商の活動拠点があったことや、有力魚問屋の多くが荷主に資金を貸付け、特定地域の物産を扱う「国問屋」を兼ねるなど、多面的な活動を行っていたことが諸文献から明らかとなってきています。今後、取扱い魚種や空間的な構造といった大坂魚市場跡単体の研究にとどまらず、各市場間の比較研究や、考古学と文献史学の総合的な研究を進めることで、本当の意味での水産物流通の実態に迫ることができるものと期待されます。



写真1 曲物容器に入れられた子イルカ

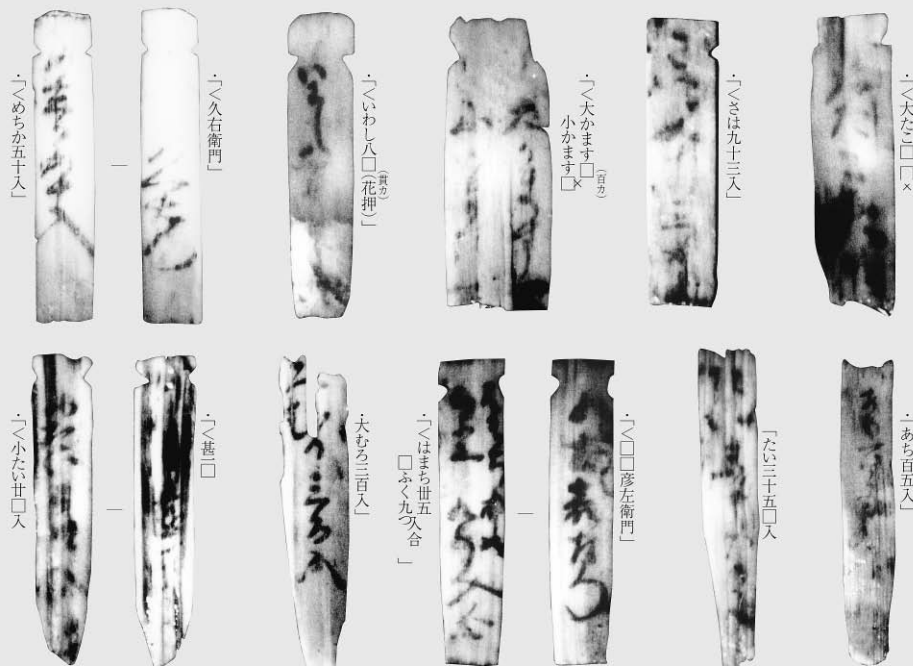


写真2 魚名を記した荷札木簡

かわら や まち い せき I. 瓦屋町遺跡 — 江戸時代の工業団地？を発見 —

執筆 者：清水 和明(しみず かずあき)
研究テーマ：東アジア古代武具
主要著作・論文：「東アジアの小札甲の展開」、『古代文化』48巻4号、1996年

①遺跡の概要と魅力

「天下の台所」という言葉が表わすように江戸時代の大坂は「商都」のイメージが色濃い一方、町屋の中やあるいは横で、大小さまざまな工業生産が活発に行われていた町でもあります。

2008年に初めて発掘調査が行われた中央区瓦屋町遺跡は、その名のとおり江戸時代に幕府の御用瓦師：寺島家の本拠地として大量の瓦が生産された地にあたります。寺島惣左衛門が大坂ノ陣で功を立て、1615(元和元)年に徳川家康から宅地46,000坪を拝領し、そこに配下の瓦師を住まわせて瓦焼きを始めました。その子藤右衛門の代には宅地の地続き130石の土地を「瓦土取り場」としたと言われています。これらの場所が後の瓦屋町となりました。

②近年の主要成果

調査では瓦がぎっしり捨てられた、18世紀後半～19世紀前半頃の大きな穴がたくさん見つかりました。これらの穴からは、瓦範^{がはん}1点や、たくさんの瓦焼きの窯道具、焼け歪んで失敗した瓦片などが見つかり、周辺で瓦を焼いていた証拠と考えられます。

■瓦を捨てた穴(写真1)：写真の手前側に、瓦を多量に捨てた大きな穴が並んでいます。調査区内

では窯は見つかりませんでしたが、焼土や炭が大量に含まれており、ごく近い場所に窯焼き場があったと考えられます。

■瓦範(写真2)：瓦を作るための型で、蓮の蕾を中心に、左右に「神咒寺」・「灌頂堂」の文字を鏡像で陰刻しています。有名な西宮市の名利^{かぶとやまだいし}甲^{かんのうじ}山大師「神咒寺」が頭に浮かびますが、今のところ関係を確定できません。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

今回の調査では、陶器の未製品や型、ミニチュア玩具の型とたくさんの製品、赤色顔料のベンガラを焼いた大量の焙烙^{ほうろく}、鑄造銅製品の型をはじめとする金属加工に関する各種資料など、瓦生産以外のさまざまな工業生産に関わる資料が見つかりました。いずれも付近に工房が存在していたのでしょう。今後、この遺跡の調査が進めば、江戸時代における個々の技術を解明するだけでなく、それらが複合してさながら工業団地としての様相を呈していたことが明らかにできると思います。



写真1



写真2

う え ほ ん ま ち い せ き J. 上 本 町 遺 跡

— 難波京解明の“JOKER” —

執 筆 者：高橋 工(たかはし たくみ)

研究テーマ：古墳時代史

主要著作・論文：『平野区誌』同誌刊行委員会、共著、
2005年

大学非常勤講師等応募歴：関西大学非常勤講師(2001・2002年)

①遺跡の概要と魅力

上本町遺跡は難波宮と四天王寺の間の上町台地ほぼ全体に広がっています。歴史的環境からみても、台地上の全体が遺跡であると考えられます。しかし、早くから市街地化されたこともあって、エリア全体が遺跡として認識されたのはごく最近のことで、それまでは上本町北・南遺跡、上の宮遺跡といったように部分的に捉えられてきました。

この遺跡には都市大阪が形成される過程を解明する鍵が埋もれています。古代は難波京、中世四天王寺周辺の市街地、近世では豊臣秀吉によって造られた平野町がこの地にありますが、それらの実態は不明な部分が多く、考古学的調査の進展が待たれているのです。

②近年の主要成果

■奈良時代の屋敷地か？(写真1) …正方位に配された掘立柱建物群は少なくとも2回は建て替えられており、かなり長期間にわたって存続しています。大型の井戸を伴うことや、^{りょくゆうとう き}緑釉陶器が出土したことから、有力官人の屋敷地である可能性もあります。

■正東西に延びる溝(写真2) …幅約2mの溝が正東西方向に掘られていました。溝は8世紀前半に

は埋められ、その後に掘立柱建物が建てられていました。屋敷地を区画する溝、あるいは京の条坊道路の側溝である可能性もあります。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

大化の改新に伴う難波遷都は都市大阪の幕開けといってよいでしょう。宮の周りには京と呼ばれる市街地が開けていたはずですが。藤原京以降の宮都には条坊と呼ばれる碁盤目状の街区が整備されていました(条坊制)。難波にもこの条坊があったとする説があり、宮都研究上のひとつの焦点となっています。もし、前期の難波京(7世紀)に条坊があれば国内最古ということになります。また、上町台地には深く刻み込まれた谷が多く埋没しており、谷をまたいで条坊道路は設置されなかったとする説もあります。難波に条坊があったのかなかったのか。もし、あったならばいつからか、どの範囲に施工されていたのか。都市大阪成立の序章に関わる疑問は尽きません。

一枚めくる度に新たな展開があるトランプゲームのように、今後、この遺跡では一件の調査が行われる度に難波京の実像が明らかになっていくでしょう。



写真1

写真2

K. さいくだにいせき 細工谷遺跡

— 交差する濃密な古代史の舞台 —

執筆 者：岡村 勝行(おかむら かつゆき)
研究テーマ：パブリック・アーキオロジー(考古学と現代社会)

主要著作・論文：“New Perspectives in Global Public Archaeology”(編著)、米国Springerから近刊
大学非常勤講師等嘱歴：大阪大学非常勤講師(2000～2004年)

①遺跡の概要と魅力

発掘に発見はつきもの。だが時に予想を遥かに上回り、驚嘆をまねく場合もある。天王寺区細工谷遺跡はその最たる例である。

1996年、遺跡の発見後まもなく開始された調査で、奈良時代の溝から全国初となる和同開珎^{わどうかいちん}の枝銭をはじめ、40数枚の和同開珎(写真1)、帯金具などの銅製品や工具が発見され、鑄造工房の存在が明らかとなった。記録に現れない銭貨鑄造の可能性から偽金作り説まで登場した。

一方、溝に近接する井戸からは「百済尼」^{くだら}、「百尼」^{ぼくしよ}、「尼寺」などと記された墨書土器(写真2)が出土し、未知の古代寺院「百済尼寺」(渡来氏族百済王氏^{くだらのこにきし}による建立)の存在も明らかとなった。

これらの大発見のほかに、今日「日本最古の銭貨」とされる富本銭^{ふほんせん}も出土している。細工谷遺跡は濃密な歴史を凝縮した迫力あるモノの発見の一方で、本体そのものは未発見というミステリアスな魅力を秘めた稀有な遺跡とも言えるだろう。

②近年の主要成果

第1次調査地の周辺ではこれまで大小10数の調

査が行われている。東方200mでは木樋を使った暗渠^{あんきょ}とともに飛鳥・奈良時代の大型建物群が発見されたが、北方100mでは大規模な調査にも関わらず、寺院や工房の形跡はほとんど皆無であった。この対照的な結果から、さきの大型建物群の北側に位置する筆ヶ崎の地が最も有力な「百済尼寺」の候補地として考えられるようになった。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

まず寺院と工房のそれぞれの正確な位置と実態、そして両者の関係の解明である。この行方は難波京の一地域の歴史に留まらず、百済王氏の動向や古代銭貨の生産と流通など日本の古代史上の重要課題に直接連なる。

また、こうした大きな歴史の復原とともに、谷の湿潤な埋没環境によって、金属、木、骨、種実、花粉、寄生虫など台地上の遺跡では望めない遺物が良好に保存されている点も遺跡の大きな魅力だ。調査・研究のきめ細かさは、ダイレクトに千数百年前の「過去」の発色に繋がる。関連諸学との連携、考古学の力が試される舞台とも言えるだろう。



写真1



写真2

してんのうじきゅうけいだいいせき L.四天王寺旧境内遺跡

—「都市史」を持つ寺院の歴史を 読み解く—

執筆 者：李 陽浩(り やんほ)
研究テーマ：東アジア建築史・都市史
主要著作・論文：「古代の「根焼き」について」、『建築史学』53号、2009年

①遺跡の概要と魅力

古代の「飛鳥」が飛鳥寺の造営から始まったように、古代の「難波」が四天王寺から始まる、としたらいかがでしょうか。前期難波宮が成立する約30年前に、南北軸の存在を明確に示す一塔一金堂式伽藍(いわゆる四天王寺式伽藍)が成立したことは、後の「難波」に同じような軸線の建物が量産されることを早々に宣言してはいないだろうか。上町台地という自然条件のもと、人工的な軸線を設置することが「難波」を都市にしてきたとするなら、四天王寺は古代から中世、近世を通じて都市「難波」の代名詞であった。古代には方格地割に則った難波京内の主要寺院として、中世には幾重の溝に取り囲まれた門前町の中心寺院として、近世には幾度もの戦火・災禍にも関わらず忠実に再建された復興寺院として、四天王寺は常に都市「難波」と共にあった。四天王寺旧境内遺跡の魅力とは何よりも重畳した都市における「定点」を探る魅力であり、遺跡のキーポイントとして、まず軸線とそれにとりまなう地割をあげたいと筆者は考えている。

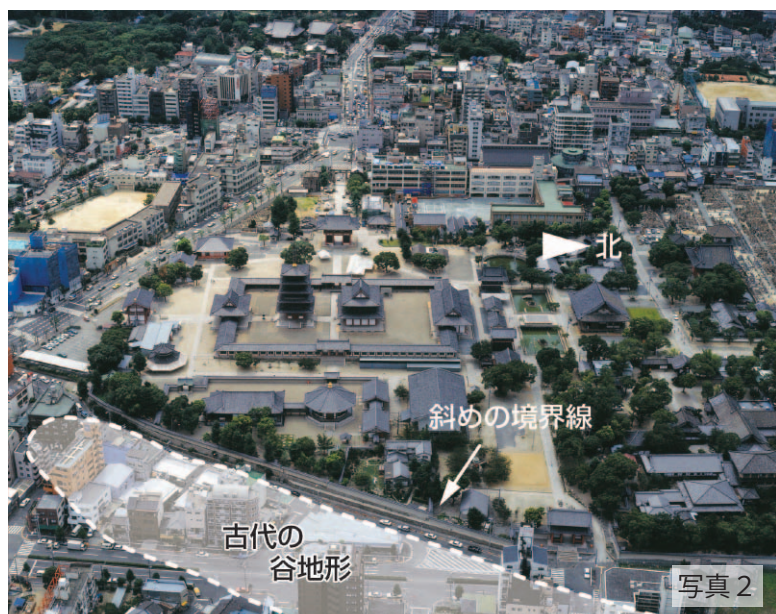
②近年の主要成果

■中世の大溝と「要塞」としての四天王寺(写真1)：中世の四天王寺では寺院周囲を取り囲む溝が見つかっている。それらは幾重にも寺院を取り囲み、さしずめ防禦ラインを形成しているかの如くである。中世の四天王寺はひとつの「要塞」であったとも考えられよう。

■古地形の復原と寺域(写真2)：寺院東南部では、細工谷へと続く谷地形によって当初の寺域が規制されており、古代の寺域は方形ではなかったと推定される。上町台地の自然地形上にいかに寺院を設置するかは、その後の四天王寺を考えた場合、非常に重要な問題を孕んでいる。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

古代都市に遷都はつきものだが、四天王寺は当地を動かずにいる。寺院周囲の景観は時代ごとに変化した。四天王寺周辺はその都度「難波」を代表する歴史的景観を備えていた。そうした意味で四天王寺は都市「難波」を貫く「軸線」であったともいえる。「四天王寺史」とはひとつの「都市史」なのであり、「都市史」から寺院を解読するという魅力を、四天王寺は私たちに教えてくれる。



M. 御勝山古墳

お かし やま こ ふん

—市内に残る100m級の中期古墳—

執筆 者：松本 百合子(まつもと ゆりこ)

研究テーマ：後期古墳・仏教美術

主要著作・論文：「装身具」『大和の考古学』第3巻
大和の古墳Ⅱ 人文書院、2006年

①遺跡の概要と魅力

生野区勝山北に所在する御勝山古墳は、帝塚山古墳とともに大阪市内に現存する前方後円墳のひとつで、1939年に大阪府史蹟に指定されました。墳丘規模は南北約120m、東西約55m、後円部高約8m、築造は古墳時代中期の5世紀前半と考えられています。現在は勝山通がくびれ部を東西に横断し、前方部は完全に削平され御勝山南公園となり、後円部だけが独立丘状に残っています。

御勝山はかつて「岡山」と呼ばれていましたが、1614～1615(慶長19～20)年大坂冬・夏ノ陣で徳川秀忠が布陣し、その戦勝記念により御勝山と呼ばれるようになりました。陣の様子は「大坂夏の陣図屏風」に描かれ、『浪花百景』には菜の花畑に囲まれた景勝地「御勝山」として描かれています。

②近年の主要成果

調査は1931年、梅原末治らの外形調査に始まります。すでに前方部は削平されていましたが、周濠と後円部の葺石や埴輪が報告されています。1973年の難波宮址顕彰会による調査でも造出しの一部に伴う葺石と周濠が検出され、前方部南端の落込みも見つかりました。文化財協会では1987年に古墳の形状と埋葬施設の有無を確かめるため、

後円部の詳細な測量と約120mにおよぶトレンチによる発掘調査を行いました。各トレンチから朝顔形埴輪や鱗付円筒埴輪、家形埴輪などが出土しましたが、墳丘については顕著な盛土構造が認められた以外、墳頂部は原形を止めず埋葬施設は確認できませんでした。墳丘の袖も斜面が直線的に削られ、大坂ノ陣での改変がうかがわれます。

1990年の調査では後円部の北東約30mで南北方向の流路を検出しました。調査目的は周濠の確認でしたが、流路から押型文が特徴の「栗津SZ式土器」(縄文時代早期～前期)が出土したことから、縄文時代の遺物包蔵地として勝山遺跡と名付けられました。現在、これら御勝山古墳や勝山遺跡の出土品は生野区役所に展示されています。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

御勝山古墳は上町台地の東縁部、河内平野や大和川を見下ろす場所に築られました。帝塚山古墳は台地の西縁部に築かれ、ともに海と川を望む要衝として注目されます。また、栗津SZ式土器の発見により、縄文時代早期～前期における上町台地東縁部の様子も少しずつ明らかになりつつあります。

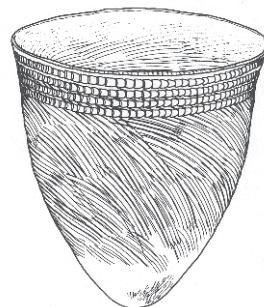


図 押型文土器復元図



写真1 御勝山古墳後円部



写真2 勝山遺跡の縄文土器

あべのすじきたいせき N.阿倍野筋北遺跡 —卒塔婆に中世のあの世を観る—

執筆 者：藤田 幸夫(ふじた ゆきお)

研究テーマ：中世考古学

主要著作・論文：『阿倍野筋北遺跡発掘調査報告』大阪
市文化財協会、2009年

①遺跡の概要と魅力

阿倍野筋北遺跡は、古代から中世、近世の遺構が検出されている。そのなかでも注目されるのは中世ではないだろうか。

②近年の主要成果

2007年度の調査で、流路から150点以上の卒塔婆^{そとば}が密集して出土した。これらの卒塔婆は一括して流されたものと考えられる。卒塔婆には記年銘を有するものもあり(図)、このうち最古の記年銘は、1461(寛正2)年、最新は1503(文亀3)年で、42年の年代幅があった。また、墨書の遺存状況はそれぞれの年号に相応している。つまり、新しいものには墨書が残り、古いものはわずかに痕跡として認められるか、あるいは墨書の痕跡すらなく、微妙な凹凸としてのみ残存している。また、下部が腐朽しているものがあり、下部は地中に挿されていたことが推定できる。

書かれている種子^{しゅじ}や偈頌^{げじゆ}から、年忌に供えられたものであることもわかる。戒名には、阿闍梨・法印・大姉・禅門・禅尼・童子・童女があり、階層差が窺える。

出土状況からは、同一墓地に建てられていた卒

塔婆が、同時に流されたことが判明した。2007年度調査で出土した卒塔婆は、流された卒塔婆の一部であり、本来はもっと多数の卒塔婆が流されたのであろう。このことは、墓地の規模を考える上で参考となる。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

これまでのところ、阿倍野筋北遺跡では、墓地が検出されていないが、出土卒塔婆からその様子が類推できよう。これまでの中世の墓地や石造物の研究から考えると、阿闍梨や法印の戒名を持つ人物には石塔を有しており、他の戒名を持つ人物は、規模の小さい石塔か、あるいは石塔を持たないと思われる。おそらく、大きな石塔を中心とした、墓地景観が想定できるのではないだろうか。

今後の調査によって、墓地が解明されることが期待される。さらに、文亀3年に墓地に大きな改変があったことが推定されることから、今後、その変革の要因を文献も含めて明らかにすることが求められる。



写真 卒塔婆が出土した自然流路→

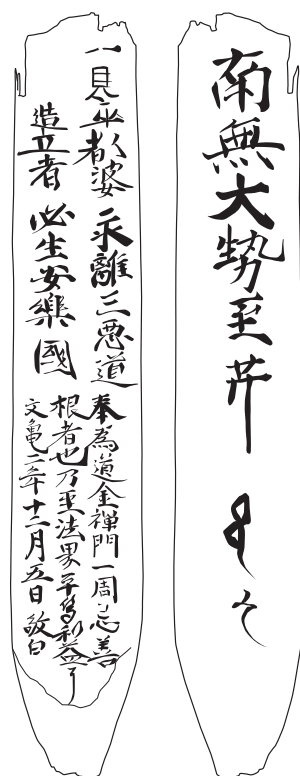


図 文亀2年銘の卒塔婆

0. 桑津遺跡

— 拠点集落の成立と解体 —

執筆 者：田中 清美(たなか きよみ)
 研究テーマ：弥生時代および古墳時代の社会史と渡来
 人
 主要著作・論文：「河内の渡来人」『河内文化のおもちゃ箱』批評社、2009年
 大学非常勤講師等嘱歴：帝塚山学院大学非常勤講師(1998年)

①遺跡の概要と魅力

上町台地の東斜面に広がる桑津遺跡の弥生時代中期の集落は、遺跡の東を流れる駒川を隔てて対置する弥生時代前期前葉に遡る杭^{くまた}全遺跡の集落が核になって成立した可能性が高い。その後も集落は拡大して弥生時代中期後葉を迎えるころには上町台地上で屈指の環濠を伴う拠点集落になった。

弥生時代の集落は、東北に河内湖を望み、背後の上町台地には森が広がる豊かな自然に恵まれていた。また、弥生時代中期の井戸から海産の魚骨や小型の蛸壺が出土したことから、大阪湾での漁労活動も生業のひとつであったと思われる。

一方、弥生時代の墓域は集落外にあり、東部で前期末～中期前葉の方形周溝墓群が、北部では中期中葉～中期後葉にかけての方形周溝墓群が見つかっている。この内、北部にある弥生時代中期中葉の方形周溝墓は墳丘の一辺が10mを越え、本遺跡最大の規模を誇ることから、集落を統率した首長家族の墓の可能性が高い。

弥生時代中期後葉にピークを迎える桑津遺跡の拠点集落は、弥生時代後期前葉には一旦廃絶するが、同後期末葉には遺跡の西北部に再び断面V字

形の大溝を伴う集落として形成される。このような弥生時代の桑津遺跡の集落に見られる盛衰は、上町台地のみならず畿内地域の弥生社会の動向および古墳時代の社会へと移行する過程を明らかにする上で重要なポイントになっている。

②近年の主要成果

遺跡の北西部で弥生時代後期末葉の断面V字形の大溝・柱穴群・土壌などを検出し、いわゆる邪馬台国時代の集落が存在したことを確認した(写真1)。赤塚・大塚・鐘子塚など「桑津三塚」と呼ばれた今は地上に墳丘をとどめない古墳につながる円筒埴輪や形象埴輪が出土し、古墳が築造された時期や墳丘についての情報を収集した。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

弥生時代中期前葉の集落が成立した契機や中期後葉に拠点集落へと発展した過程および、桑津遺跡の弥生時代中期後葉の在地色の強い土器をはじめ、磨製石器の素材の分析をすれば、土器や石器からみた他地域との交流や物流の実態が明らかになるものと思われる。



写真1 弥生時代後期末葉のV字溝



写真2 弥生時代中期後葉の外来系土器

しょうごんじょう ど じ けいだい い せき P.荘厳浄土寺境内遺跡

執筆者：村元 健一(むらもと けんいち)

研究テーマ：東アジアの都城と陵墓

主要著作・論文：「前漢皇帝陵の再検討－陵邑、陪葬の変遷を中心に－」『古代文化』第59巻第2号、2007年

①遺跡の概要と魅力

荘厳浄土寺境内遺跡は住吉大社の東側に位置します。現在でもお寺があり、不動明王坐像と愛染明王立像は大阪府の有形文化財となっています。荘厳浄土寺の創建年代は、平安時代とされていますが、不明な点も多く、確実なのは第39代住吉神主・津守国基^{つ もりくにもと}による1084(応徳元)年の造営です。1096(嘉保3)年には落慶法要が盛大に営まれ、その華やかな様子は都にまで伝わりました。その後、寺は次第に衰え、16世紀には相当荒れていましたが、豊臣秀頼により復興します。しかし、大坂ノ陣の戦火を受け、現在の本堂は江戸時代のものです。境内には今なお巨大な礎石が点在し、周辺からも蓮華文の瓦が見つかり、かつての繁栄をしのばせます。

②近年の主要成果

この遺跡の発掘調査は、2002年に境内西側で行われたものがほぼ唯一のものです(写真1)。調査の結果、鎌倉時代の井戸や柱穴がたくさん確認され、羽釜^{はがま}や碗などの日常用具、瓦(写真2)などが

多量に出土しました。調査の成果をまとめますと、鎌倉時代13世紀中ごろに井戸・建物があり、14世紀には耕作地となり、17世紀に池などが築かれたという変遷が明らかとなりました。鎌倉時代の井戸などは寺に関連する施設、17世紀の池は豊臣秀頼による再建に関するものと考えられます。その間の耕作地の評価については、直前の井戸を埋めた土の中に焼けた瓦があることから、何らかのトラブルが寺を襲い、それが関係して耕作地となったと考えられます。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

このように荘厳浄土寺の調査はまだ始まったばかりで、遺跡の広がりや変遷については今後の課題となっています。しかし、この寺の歴史は住吉神主家である津守氏の盛衰と密接にかかわっており、住吉大社や神宮寺、津守庵寺あるいは津守氏居館^{すみよしあんぐうあと}でもあった住吉行宮跡など周辺の遺跡と関連させることで、津守氏の歴史あるいは住吉地域の歴史を明らかにできるものと考えています。住宅地の中の小さな調査の積み重ねとなりそうですが、この周辺の遺跡の調査には今後も注目していきたいと考えています。

写真1



写真2

かり た ちょう め しょざい い せき Q.荻田 4 丁目所在遺跡

— 住吉周辺の^{い も じ}鋳物師集団 —

執筆 者：平田 洋司(ひらた ようじ)

研究テーマ：日本考古学

主要著作・論文：「豊臣氏大坂城の三ノ丸造成を巡って」、『大阪市文化財協会研究紀要』第3号、2000年

①遺跡の概要と魅力

住吉区に所在する荻田4丁目所在遺跡は2001年に指定された比較的新しい遺跡です。これまでの数度の調査で古代から近世の遺構・遺物が見つっていますが、特に注目されるのは中世の鋳造関連の遺構・遺物です。

中世から近世にかけて鋳物師集団を統率した^ま真継家に伝わる「河内国^{かわちくわい}鋳物師座法」という文書には荻田や我孫子^{あびこ}など住吉周辺では中世に多くの鋳物師集団が活躍していたことが記載されており、これを裏付ける資料が徐々にそして確実に得られつつあります。

②近年の主要成果

初めての発掘調査となる2002年の調査では、多くの炉壁や鋳型片を含む14～15世紀の土壌群が見つかりました(写真1)。土壌群は、炉や鋳型の材料となる粘土を採掘するために掘られ、のちに不要ものの廃棄場所として利用されたのでしょうか。工房に隣接した場所と考えられ、文書に記された荻田鋳物師の実在を示す発見となりました。

2006年の調査では、さらに多くの鋳造関係の遺

物が出土しました(写真2)。15～16世紀はじめの工房の一部とこれらを囲う堀も見つかり、工房の中心や集落の位置を推定する手掛かりが得られ、荻田鋳物師の実態に大きく迫ることとなりました。

調査は2009年にも行われ、着実に解明に向けての資料は蓄積されてきています。また、西に位置する山之内遺跡でも中世から近世の鋳造関連の遺構や遺物が発見され、こちらは同文書の我孫子鋳物師と関連するものとして注目されます。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

新発見の遺跡ということもあり、まだまだデータが不足しています。山之内遺跡など周辺の遺跡も含めた今後の発掘調査の進展により、住吉周辺の中世鋳物師の実態について解明が進むものと考えられます。

また、難波大道^{なにわだいどう}や依網池^{よさみいけ}に隣接するなど、古代においても地理的に重要な位置にあることから、古代における土地利用を明らかにすることも目標のひとつです。



写真1



写真2

お り お の い せ き R.遠里小野遺跡

すみのえ えなつのみなと
— 住吉の「朴津水門」 —

執筆 者：黒田 慶一(くろだ けいいち)

研究テーマ：日本城郭史(倭城・大坂城)

主要著作・論文：『韓国の倭城と壬辰倭乱』岩田書院、
編・共著、2005年

大学非常勤講師等[※]嘱歴：京都造形芸術大学通信教育部
非常勤講師(2006年～)

①遺跡の概要と魅力

遠里小野遺跡は住吉区に所在し、東で山之内遺跡と接しますが、元々両遺跡はひとつの遺跡で、行政区画で二分されたに過ぎません。遠里小野遺跡は1939年の発掘調査以前から、漁具である土錘や飯蛸壺が出土することから、大規模な漁撈集落として学界の注目を集めてきました。

80年代前半の遠里小野7丁目の調査で、6世紀後葉の土壌から滑石製の^{かっせき}管玉・^{くだたま}白玉、^{うすだま}加えてその未完成品が多量に出土し、祭祀用の滑石製品がこの地で製作されていたことが確認されました。80年代後半には、その東方約200mの2丁目の調査で、7世紀後葉の楼閣風建築と考えられる巨大な掘立柱建物が見つかり、2007年の7丁目の調査で、7世紀中葉の巨大な掘立柱建物が発見されました(写真1)。また南東方約500mの3丁目の字「^{えなつ}榎津」の調査では、7世紀後葉創建の「榎津廃寺」の瓦が多数出土しています(写真2)。

②近年の主要成果

■巨大な掘立柱建物(写真1) …東西棟で梁側3間、桁側9間以上で、真東西を示し、柱筋もきれいに通り、柱の太さも40～50cmを測ります。



■2006年の調査出土の古瓦(写真2) …榎津廃寺では山田寺式の単弁蓮華文軒丸瓦が見つかりました。難波遷都時(646年)の実力者、左大臣^{そがのくらやまだのいしかわまる}蘇我倉山田石川麻呂(山田寺の建立者)を連想させますと同時に、榎津廃寺の創建が難波遷都とリンクする感を抱かせます。またその後の調査で、東住吉区田辺廃寺と同範の複弁七弁蓮華文軒丸瓦も出土しました。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

住吉区は海の神「住吉大社」が鎮座し、堺市の百舌鳥古墳群に近いことから、5世紀の「倭の五王」時代から港津として栄えてきた地であると考えられてきました。しかし、住吉大社や遠里小野・山之内遺跡の発掘調査成果をみる限り、当地の開発は6世紀以降です。7世紀中葉の難波遷都で、大和と難波を結ぶ官道が整備され、遠里小野遺跡周辺では「難波大道」が東約2kmを通っていますので、当遺跡はこの時期に急速に整備された可能性が考えられます。



写真1

写真2

ひらの かんごう と し い せき S.平野環濠都市遺跡

— 神仏と共生する 千年都市「平野」—

執筆 者：平井 和(ひらい かず)

研究テーマ：石器文化研究 中近世都市景観研究

主要著作・論文：『絵図からみた近世平野環濠都市遺跡における街区の構造』『大阪市南部遺跡群発掘調査報告』大阪市文化財協会、2009年

①遺跡の概要と魅力

JR平野駅の南東部に、清々しい鎮守の森があります。そこは平野の夏祭りで有名な杭全神社です。その社の北側には、かつて300年間近世～近代の平野をぐるりと囲っていた堀が部分的に残されており、かつての面影を伝えています。平安時代から平成時代までの1000年間、「平野」といえば桓武天皇ゆかりの坂上広野麻呂一統による開発と、その後「平野七名家」が治めたこの地を指します。一方環濠の由来は、中世に遡ります。文献上応仁の乱の頃に近畿一円の主な集落や真宗寺内に環濠が設けられていたことはわかっていますが、考古学的に中世都市「平野」の実像はわかりません。そして、大坂ノ陣の前後には織田家・豊臣家・徳川家といった政権領主の直轄地として重要な役目を果たしてきました。今も近世の町割りが残る平野の地下には誰も知らない千年都市「平野」が眠っているのです。

②近年の主要成果

平野環濠都市遺跡として大阪市の遺跡とされてから30年ほどになりますが、この間、旧環濠内で発掘調査が行われたのは33件です。杭全神社や、全興寺・光永寺・浄永寺・永福寺の境内や、屋敷

地などで調査が行われました(写真1)。当遺跡の東北部の屋敷地での調査では、応仁の乱の頃の焼土層や大坂ノ陣の焼土層が当時の遺物とともに出土していることから、中世以降の戦乱と都市の変遷を探究することができます。環濠の調査も行われ、近世に整備された堀の下から、弥生時代の土器も見つかりました。当遺跡の周辺には、鞍作村・正覚寺村・喜連村といった古くからの集落があることから、「平野」とともに弥生時代以降に開発された集落が点在したことが推測されます。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

千年都市「平野」には飛鳥時代以降に創建された寺や神社があって、神仏習合的な行事や墓も残されており、忘れられた宗教観が今でも息づいているようです。寺や神社が集落の形成や変遷に与えてきた歴史的役割を近世に描かれた絵図を使って考古学的に検証することで、中世から近世の都市景観の移りかわりを読み解いていきたいと思えます(写真2)。



写真1 平野区平野東2丁目での調査

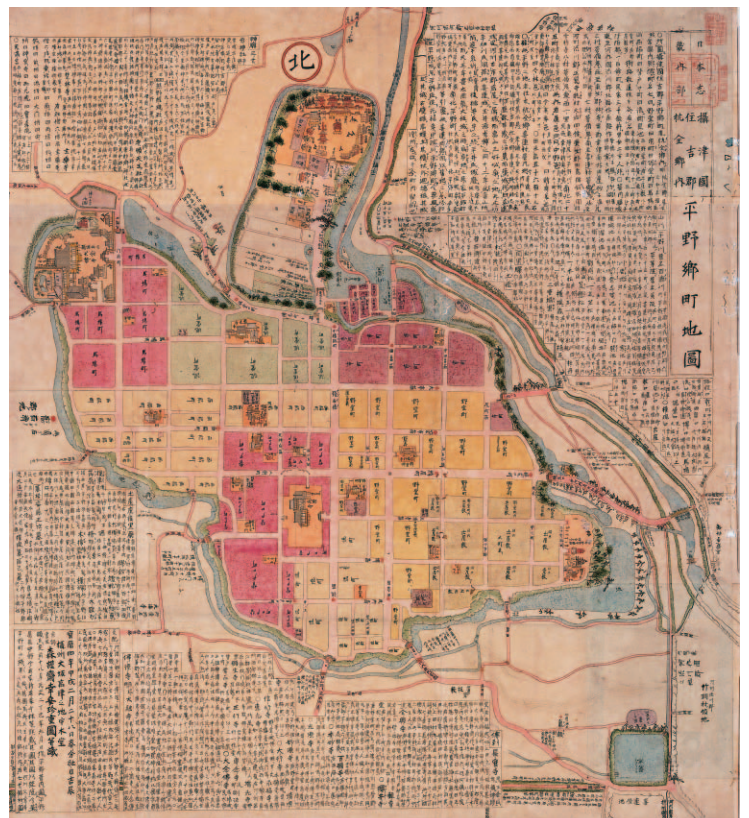


写真2 『摂津国住吉郡杭全郷内平野郷町地図』
(独立行政法人国立公文書館所蔵)

T. 加 美 遺 跡

— 河内湖南岸の

古墳時代都市の残影 —

執 筆 者：杉本 厚典(すぎもと あつのり)

研究テーマ：弥生・古墳時代の土器

主要著作・論文：「古式土師器編年集成 河内地域」『古式土師器の年代学』、2006年

①遺跡の概要と魅力

加美遺跡は平野区に所在し、すぐ東側には八尾市^{きゅうほうじ}久宝寺遺跡が位置しています。調査が行われるようになったのは、1970年代初頭のこと。弥生時代中期後葉の大型墳丘墓の発見で一躍有名になりました。これまでに37次の本調査を実施し、延べ3万㎡余りの面積を調査しており、弥生時代中期の墳丘墓や水田、古墳時代前期の集落とそれに隣接する墓地、古墳時代中期の建物、奈良時代の建物や流路などが見つかっています。調査を通じて、加美遺跡一帯が、古墳時代当時に河内湖の南岸で、旧大和川の本流の近くに位置する水運の開けた場所であったことが明らかになってきました。

②近年の主要成果

■外来系土器(写真1)とそれが出土した土器集積(写真2) …KM84-1次では朝鮮半島南部地域からの陶器質土器、東海系土器などがみつかり、他地域からの土器が多く当遺跡にもたらされていることがわかっていました。さらにKM01-4次調査では大廓式二重口縁壺^{おおくるわしき}が見つかりました。出土した時、器壁が分厚いので「埴輪」と思っていたのですが、取り上げてびっくり、表面には縄文が付いていたのです。古墳時代初頭に縄文が付く土器は非常に珍しく、東海地方の東部に分布する

大廓式土器であることがわかりました。畿内地域では邪馬台国の中心地の可能性が指摘されている奈良県桜井市^{まきむく}纏向遺跡に次ぐ二例目の出土例、しかも土器の中にはスコリアが含まれており、東国から持ち運ばれたものでした。朝鮮半島からの陶質土器やこの大廓式土器などから、加美遺跡がスケールの大きな交流を担った拠点集落であり、歴史を通して物資や文化の交流拠点であった大阪という都市の性格が色濃く出ている遺跡であることをあらためて感じました。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

この加美遺跡は隣接する久宝寺遺跡と一体になって、大和川の自然堤防上に東西1.5km、幅0.4kmの「遺構密集地帯」を形成しています。これまでの調査からは竪穴建物や掘立柱建物で構成される小規模な居住域が散在し、それらの居住域と居住域の間に畠や墓域が拡がるといった集落景観が復原されます。このような集落景観からは交易の拠点とするには統制を欠いており、経済的にも貧弱な印象を受けます。おそらくどこかに、昨年、纏向遺跡で見つかったような大型掘立柱建物を中心とした、まつりごとや交易の中核部があるのでしょうか。それを発見し、都市大阪へのつながりを明らかにできればと願っています。



写真1



写真2

ながはら い せき U.長原遺跡(旧石器時代) — 氷河期を生きた狩人たちが 残した石器群 —

執筆 者：絹川 一徳(きぬがわ かずのり)

研究テーマ：考古学(旧石器時代)

主要著作・論文：『旧石器考古学辞典(増補改訂版・三訂版)』旧石器文化談話会編、学生社(共著：編集委員)、2000・2001・2007年

大学非常勤講師等嘱歴：大阪外国語大学非常勤講師(2004～2006年)ほか

①遺跡の概要と魅力

長原遺跡の東南側に当たる平野区長吉川^{かななべ}辺三丁目の一帯では、長年にわたる発掘調査によって多くの地点から後期旧石器時代を中心とする石器製作址が見つかった。河内台地の先端で北東縁部に立地しており、隣接する八尾南遺跡とともに最終氷期を生きた旧石器人のベースキャンプが盛んに営まれていた場所であった。

長原遺跡は高槻市^{くんぎいましろ}郡家今城遺跡とともに1970年代後半に発掘調査が行われた遺跡であり、府下では早い段階から旧石器時代遺跡として知られていた。したがって、当初から旧石器研究を意識した先進的な調査法が積極的に採用されてきた。個々の地点の発掘規模は大きくなかったものの、それぞれの調査成果を丹念に積み重ねた結果、後期旧石器時代(約40,000～15,000年前)を通して複数時期の多様な構成の石器群が存在することが明らかとなった。いずれも石器石材には二上山産サヌカイトが使用されている。

後期旧石器時代前半期ではNG90-62次調査地の石器群がある。鹿児島湾に噴源をもつ始良^{あいり}Tn火山灰(較正年代で約28,000年前)の降灰層準下位から石器群が発見された。台形石器やナイフ様石器^{だいきい}が出土しており、近畿で展開した横剥ぎ系石器文化^{よこは}の成立を探究するうえで貴重な資料である。この石器群は大阪平野で確認された最古段階のもので

あるとともに、広域降下火山灰との関係から具体的な年代を推定することができた。

後期旧石器時代後半期ではNG97-12次調査やNG89-37次調査地の石器群がある。前者では阪手火山灰(島根県^{しまね}の三瓶浮布火山灰とされる)の下位から石器群が発見された。この時期に盛行した瀬戸内技法とともに石刃技法^{せきじん ぎ ほう}によって製作された多様な形態のナイフ形石器が出土した。後者では横剥ぎの小型ナイフ形石器が多数出土した(写真1・2)。隣接する八尾南遺跡第6地点からも類似の石器群が見つかった。ほかにも川辺地区では、縄文時代草創期の有茎尖頭器^{ゆうけいせんとう き}がまとまって出土しており、尖頭器の製作跡(NG89-19次調査地)も確認されている。

②近年の主要成果

河内台地先端の北西縁部に当たる瓜破北遺跡においても石器製作址が新たに発見され、旧石器人のベースキャンプがあったことが判明した。長原遺跡との比較研究が今後重要となろう。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

長原遺跡と周辺地域の最新資料と研究成果をもとに、石器群の変遷(旧石器編年)と二上山産サヌカイトを用いた横剥ぎ系石器文化の起源を解明することが課題である。

写真1



写真2

ながはら い せき U.長原遺跡(弥生~古墳時代) —大阪屈指の弥生・古墳時代遺跡—

執筆 者：大庭 重信(おおば しげのぶ)
研究テーマ：弥生時代墓制・東アジア農耕
主要著作・論文：「方形周溝墓の葬送儀礼」『弥生時代の考古学 第7巻』同成社、2009年
大学非常勤講師等応嘱歴：大阪外国語大学非常勤講師(2005~2007年度)

①遺跡の概要と魅力

平野区に所在する長原遺跡は、南から延びる河内台地の先端と北側の沖積平野にまたがる、旧石器時代から江戸時代までの複合遺跡です。特に弥生時代には、隣接する瓜破・亀井・八尾南遺跡などとともに、大阪平野で最も遺跡が密集する地域の一角を占め、古墳時代中期には、大王陵が築かれた古市古墳群^{ふるいち}と近接し、200基を超える古墳群や豊富な渡来系遺物の出土から、当時の王権と深く関わった集落と考えられます。

長原遺跡の最も大きな特徴は、標準層序に基づいた層位的な発掘調査によって、広い範囲で地層のつながりとその重なりが明らかにされている点で、時代によって移り変わる地形環境と人間活動との関係を細かく知ることができる、全国的にも稀な遺跡と言えます。

②近年の主要成果

2002・2003年度に行った出戸自然堤防上の調査で、弥生・古墳時代の集落内部の様子が明らかになってきました(写真1)。まず、弥生時代中期には複数の^{たてあな}竪穴住居や貯蔵穴と集落を囲む大溝が見つかり、集落内で青銅器生産を行っていたことがわかりました。また、弥生時代の終わりから古墳

時代の初めには円形周溝墓^{しゅうこうぼ}や方形周溝墓が築かれ、墓域の一角からは粘土槨^{ねんどかく}をもつ古墳時代前期後半の方墳も見つかっています。古墳時代中期には、^{かんしきけい}韓式系土器や初期須恵器などの渡来系遺物が多く出土するとともに(写真2)、鍛冶工房や玉作りの跡が見つかり、集落内で各種の手工業生産を行う地区があったことが判明しました。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

長原遺跡の調査・研究は、協会30年の歩みとともに進展してきました。これまでの成果の蓄積を総合化し、遺跡をとりまく景観と人々の営みの変遷を大きな観点から語っていく段階にきていると言えます。



写真2



写真1

V. 瓜破遺跡

—開析谷の調査と古環境変遷—

執筆 者：小倉 徹也(おぐら てつや)

研究テーマ：大阪平野の発達史

主要著作・論文：「上町台地北部西側の完新統海成層
—中央区瓦町での調査結果—」『大阪
歴史博物館研究紀要』第1号、2002年

①遺跡の概要と魅力

瓜破遺跡は、かつて大阪の弥生時代前期後半の土器様式が「瓜破式」と呼ばれ、また中国新代の貨幣である「貨泉」が発見されるなど、近畿地方の代表的な弥生時代の遺跡として知られています。遺跡の範囲は、南から北へ延びる瓜破台地から河内平野にかけて広がっています。台地上には現在では地上から見ることでできない西谷・東谷・馬池谷と呼ばれる開析谷が埋没しており、今見るよりもずっと起伏に富んだ地形をなしていたと考えられています。このうち、最近調査を行った西谷は約2万年前、最終氷期最寒冷期以降の侵食によって形成されたことが確認されました。西谷の集水域は後背の河内台地にほぼ限られ、台地以外からの流入がないことから、混入の少ない情報が得られる利点があります。

②近年の主要成果

■西谷のようす(写真1) …西谷の西半部を発掘した結果、谷の深さは現地表から約5m、北北東へ流下していたことが明らかになりました。谷幅は50～60mと推測されます。

■西谷底の流路と鬼界アカホヤ火山灰の堆積状況(写真2) …谷底の最も深いところで幅約4m、深さ約1mの流路が確認されました。流路内には鬼界アカホヤ火山灰(約7300年前、縄文時代早期末)が壁にへばりつくように堆積し、これを侵食した

砂礫層中から縄文時代早期末～前期初頭頃の縄文土器が出土しました。このことは縄文時代早期末頃までには既に西谷の地形が形成されていたことを示しています。また、砂礫層の堆積は縄文時代晩期頃まで続き、弥生時代以降は細粒な砂と泥の堆積に変わります。河内平野ではまだ洪水が頻発していた時期、西谷は比較的穏やかで安定した土地であったことを物語っています。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

花粉・珪藻などの分析から、縄文時代早期末～前期頃の瓜破台地先端付近は河内湾奥の河口であったことが分かってきました。河岸にはアシ原が、西谷近辺は草地が広がり、既に後氷期の暖かな気候になって、気温は現在とほぼ同程度にまで上昇していました。縄文土器が見つかったことから、上流側(台地の南側)に縄文人の生活の場があったことが推測されます。自然と人類がどのように関わっていたのか、深く追いかけてみたいと考えています。



写真1

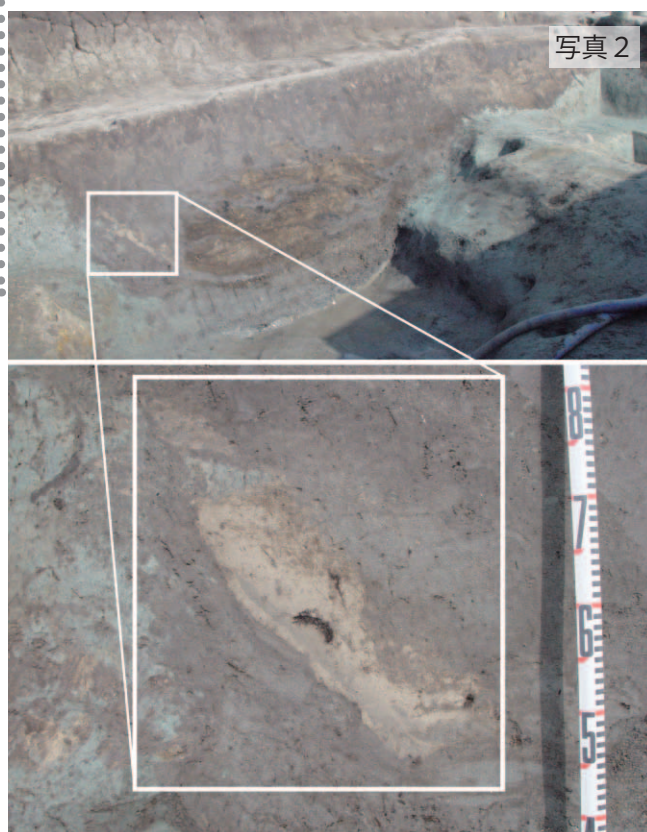


写真2

うりわり うりわりきた
W.瓜破・瓜破北・
 き れ ひがし い せき
喜連東遺跡
 —河内国丹比郡の古代史への展開—

執筆 者：京嶋 覚(きょうしま さとる)
 研究テーマ：考古学・国家形成期の社会史
 主要著作・論文：「道路状遺構と「磯齒津路」」『立
 命館大学考古学論集』Ⅱ、立命館
 大学考古学研究室、2001年
 大学非常勤講師等応募歴：立命館大学博物館学各論非常
 勤講師(2004年～)ほか

①遺跡の概要と魅力

平野区に所在する瓜破遺跡は戦前から日本の農耕文化が始まった頃の代表的な遺跡として知られていた。その後も、弥生土器とともに採集された貨泉や、瓜破北遺跡で前漢・新・後漢代の中国鏡の破片が出土するなど、弥生時代、大陸文化がいち早く伝わった先進地域の遺跡であることが明確になった。

一方、古墳時代以降も瓜破台地上では集落の発達や古墳の造営を示す土器や埴輪が多く出土し、飛鳥時代にかけて台地南部に整然と配置された官衙的な掘立柱建物群が姿をあわらす。そこでは、東方の長原遺跡で発見された広大な水田地帯や灌漑水路を計画的に造成するとともに、稲作生産を管理・運営していたと考えられる。

また、台地南部の建物群が廃された奈良時代には、喜連東遺跡に新たな建物群が登場し、瓜破廃寺や成本廃寺といった古代寺院の存在も想定され、平安時代から中世を通じて、発達した中世村落に繋がっている。

これらの遺跡は、弥生時代にいち早く発達した地域が、それ以後も絶えることなく発展を続け、古代・中世を通じて繁栄を維持した重要な遺跡群であるが、それだけに未だ数多くの謎を秘めた遺跡でもある。

②近年の主要成果

瓜破・瓜破北遺跡では低地部の調査が西へ西へと進められ、旧石器時代の石器製作址(写真1)や縄文時代の谷、弥生時代から古墳時代初頭の集落跡などが発掘された。さらに、東半部の瓜破台地上では「西谷」「馬池谷」の発掘が進み、縄文時代以来埋没していった様子が明らかになった。

また、台地北端部では喜連東遺跡と同様の古代建物群が発見され、『日本書紀』に登場する「磯齒津路」と推定される長居公園通りに面した古代建物群の存在が新たに判明した(写真2)。

③遺跡を通じて明らかにしたいこと

瓜破・喜連東遺跡の地域における古代の発達は目を見張るものがあり、河内国丹比郡の北端にあたるこの地域が長原遺跡とともに、日本の歴史を語る上で重要な役割を果たしていたのではないかと考えている。これからも新たに重要な発見が期待される遺跡であり、建物や道路遺構などの調査研究をさらに深め、難波宮や南河内・飛鳥地域とこの地域との交通関係を明らかにしていきたい。



写真1



写真2

より多くの文化財を守るために

— 糖アルコール含浸処理法の開発と普及 —

執筆者：伊藤 幸司(いとう こうじ)
研究テーマ：文化財保存科学・金属加工技術史
主要著作・論文：「糖アルコール含浸法の進展と注意点
—はじめて糖アルコール含浸法を試みられる方へ」
『遺物の保存と調査』クバプロ、共著、2003年
大学非常勤講師等応募履歴：大阪芸術大学非常勤講師(2005年～)

①出土木製品の状態

保存処理を必要とする遺物の中でも、特に取扱いに苦慮するのは木製品です。木製品は地中にある間に木の成分が流出し、換わって過剰な水分を含んでいます。この水分を不用意に蒸発させてしまうと、割れたり元の形が分からなくなるほど変形してしまうものがほとんどです。ですから、乾かさないように水に漬けて置いておくのですが、傷みは徐々に進行し、改善することはありません。この水分を安定する物質に置き換えて劣化の進行を止め、調査や展示に活用しようというのが木製品を保存する目的です。

②新たな処理方法の開発

当協会では短期間のうちにより安定した保存処理を行うため、糖アルコール含浸処理法の実用化に着手し、成功しました。糖アルコールとは、いわゆるアルコールではなく、工業的に製造された糖の一種で、お菓子などの食品に使用されているものです。これを木製品にしみ込ませて固めるのです。作業工程は、甘納豆などの砂糖菓子の製法によく似ています。木製品を保温槽に漬けて加熱

し、そこへ糖アルコールを溶かしこんでいきます。徐々に濃度を上げて80%ほどの溶液が木製品にしみ込んだら取出します。しかし、このままでは水飴のように硬くなるだけで安定しません。安定させるためには結晶させなければならない、ではどうすればよいのか…。試行錯誤の結果、糖アルコールの粉末をまぶすことを思いつきました。こうすると粉末が核となって結晶化が促進され、安定した処理結果が得られるということをつきとめたのです。

③技術の発信、世界へ

実用化に成功してから14年、当協会では研究を継続して行い、より安定した保存処理結果を得るための温度環境を明らかにするなど、糖アルコール含浸処理法の開発機関として技術の向上と、情報の発信に努めています。この方法は日本各地へと普及し、更に中国や韓国、ハンガリー、ポーランド、メキシコなど海外でも取り入れられています。大阪市発の保存処理技術が海を越えて文化財の保存に役立っているのです。



はるくさ木簡の処理前(左)と処理後(右)



大型木製品保存処理の様子

文化財の痛みを取り除き、傷みを治す技術

― 出土金属製品の保存処理 ―

執筆者：藤田 浩明(ふじた ひろあき)

研究テーマ：文化財保存科学

主要著作・論文：「糖アルコール含浸処理法における固化・乾燥工程の検討(その2)―トレハロースを添加した際の結晶促進方法―」(日本文化財科学会ポスター発表)、共同発表、2008年

①金属製品保存処理の概要と魅力

長い間土の中に埋まっていた金属製品はそのほとんどがサビで覆われています。このサビの原因となる酸素(空気)、水分、塩分を取り除き、傷んで弱くなった部分を強化し、後世に伝えていこうというのが金属製品を保存する目的です。具体的には内部構造を確認するためのX線透過撮影(写真1)、表面を覆うサビの除去、脱塩処理や合成樹脂を内部まで浸透させるための減圧樹脂含浸処理などを行います。1988年に保存科学室が設置されてから七ノ坪古墳や細工谷遺跡など、大阪市域から出土した数多くの金属製品の保存処理を手掛け成果をあげてきました。

実際の保存処理作業は、出土した時はサビの塊だったものを、X線写真を見ながら丹念にサビを取り除いていくというような非常に根気を必要とする作業です。しかしこうした地道な努力の積み重ねによって、出土時には想像もつかなかった遺物本来の姿に甦らせることができるということが、金属製品保存処理の大きな魅力のひとつと言えるでしょう。

②近年の技術的進歩

2002年に高温高圧脱酸素水法によって脱塩処理を行なう装置(写真2)と減圧樹脂含浸装置を導入しました。従来の脱塩処理は、長い時間をかけて行なっていましたが、この装置の導入により遺物内部の塩分を効果的に除去できるようになりました。また処理期間も短くなったので、金属製品の保存処理効率が飛躍的に向上しました。

③貴重な文化財を遺すために

金属製品の保存処理を行うにあたり、先に述べた以外にも様々な技術があります。それは蛍光X線分析のように金属の材質を特定することや、X線CTスキャナのように見えない部分をより詳しく観察するといった科学的手法を駆使したものです。最近ではこのような技術の進歩により、これまで謎だったことが簡単に解明されるようになってきました。最先端の科学技術を駆使する作業と、職人的な手作業。この両極端に思える技術をうまく融合し最大限活用することで、文化財を将来に伝え活用していくことができると考えています。

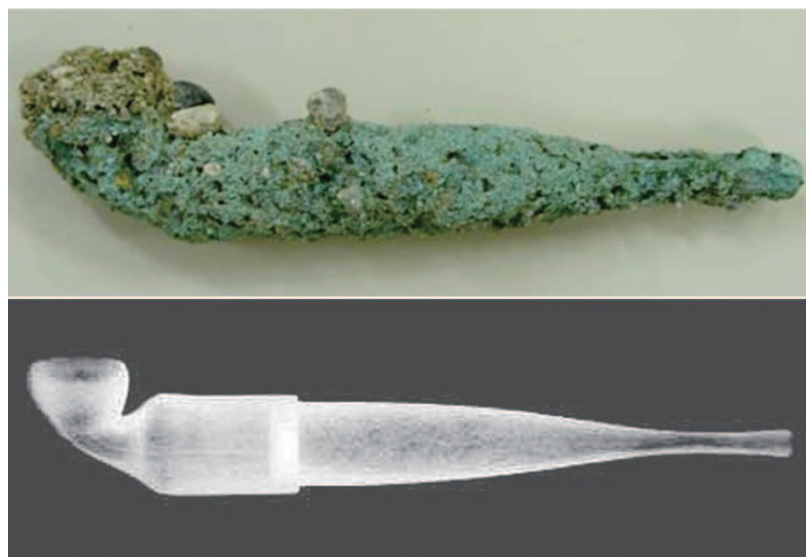


写真1 サビに覆われたキセルとそのX線写真



写真2 脱塩処理装置